粲物

植は則ち無意なり。動は則ち有意なり。故に氣は溫動冷止を隔て、體は竪堅横輭を隔つ。故に植は骨液を身生に於て一にす。動は性爲を意技に於て分つ。混ずれば則ち其の文を没し、分てば則ち其の文を露す。文なる者は、臟腑に依りて成る。臟なる者は、氣を藏むる者なり。故に能く氣と交を爲す。腑なる者は、物を納るる者なり。故に能く物と接を爲す。神本は精麁を分つ。臟腑は内外を分つ。故に混物は、則ち身生神爲にして、動植は同じく之を有す。粲物は、則ち臟腑意作にして、動は能く之を分つ。是を以て、動は粲物を有す。以て氣質に交接す。是に於て、神本天地の氣を内に於て有し、彩聲臭味の氣を外に於て交う。水穀便溺の質を内に於て畜え、配嗣器地の質に外に於て接す。神なる者は、爲の神にして、之を心に於て運す。本なる者は、成の天にして、之を腎に於て持す。

神は有意を爲し、本は無意を成す。本神は以て一身を混成す。然りと雖も、神は心に由りて運神の地を占む。本は腎に由りて持本の地を占む。故に神本の二氣は、能く混粲の物を成す。心腎の二物は、能く運持の氣を成す。天氣なる者は動なり。嘘噏して之を肺に於て保す。地氣なる者は實なり。飲食して之を肝に於て化す。彩なる者は、體の靜にして而して有する者なり。之を目に於て視る。聲なる者は、氣の動にして而して發する者なり。之を耳に於て聽く。

既に其の竅を開けば、則ち　各　其の神を有し、各　其の知覺を爲す。色なる者は、目の覺る所なり。而して色は氣質を有す。氣は明暗に色し、質は黒白に彩す。蓋し目は全明に逢えば則ち閉じ、至暗に値えば則ち盲す。晝は則ち神旺し、夜は則ち神潛む。蒼蒼の天、歴歴の曜より、物を彩に於て爲せば、則ち得て之を見る。故に目や明なれば則ち彩を其の中に於て辨じ、暗なれば則ち彩を其の中に於て失す。彩なる者は、靜にして有す。故に常に之を有す。聲なる者は、動にして發す。故に時として之を有す。蓋し彩聲臭味の氣は、則ち意爲の用いざること能わざる所なり。已に之を用いざること能わざれば、則ち其の交器無きこと能わず。彩なる者は、體の靜にし

て之を有す者なり。聲なる者は、氣の激にして之を得る者なり。蓋し色なる者は則ち明暗と寒熱の氣と偶す。氣の大なる者なり。彩なる者は則ち黒白と清濁の氣と對す。氣の小なる者なり。故に人は明暗に睡覺し、寒熱に肅舒す。黒白に見、清濁に聞く。蓋し彩聲臭味は、物は各おの之を有す。物は限る所有れば、則ち彩聲臭味も、亦た限る所有り。彼、暗からざれば則ち明に、明ならざれば則ち暗く、寒からざれば則ち熱し、熱せざれば則ち寒するに異なる。目は、隆然洞朗にして其の彩を辨ず。耳は、邃乎空豁にして其の聲を受く。其の氣は精を以て鼻舌の上に居る。又た臭味と精麁と偶を爲す。

臭なる者は、氣の熱に由りて釀す者、之を鼻に於て聞く。味なる者は、性の潤に由りて畜うる者、之を舌に於て味う。

聲なる者は激にして發す。彩なる者は靜にして有す。臭なる者は動にして發す。味なる者は靜にして有す。又た各おの精麁有り。凡そ物は各おの彩聲臭味を有す。彩は目に覺り、聲は耳に覺り、臭は鼻に覺り、味は舌に覺る。是れ、外に在る者なり。且つ其の己に有するが者の如きなり。彩味なる者は靜なる者なり。臭なる者は内畜して外發せず。聲なる者は内運して外發す。故に臭なる者は、血肉便溺の畜なり。聲なる者は、思慮運爲の發なり。内畜の臭は、外に漏るる者を胡と爲す。外發の聲は、内に結する者を唖と爲す。且つ夫れ家狗の人を尾する。風に向って鼻を鼓し、左右迂曲し、必ず其の跡を辨ず。是に由りて之を觀れば、人の覺は、舌を鼓するに通じ、狗の覺は、鼻を聞くに通ず。

水なる者は、物を液する者なり。穀なる者は、物を養する者なり。之を咽に於て納れ、之を胃に於て畜う。便なる者は穀の滓なり。溺なる者は液の汚なり。之を腸に送り、之を脬に收む。物は通氣に從いて行く。神爲を以てして爲す。經には則ち相い繼ぎ、緯には則ち相い對す。

衰衰として逝く。故に小物も亦た之に繼て從う。坱坱として塞す。故に小物も亦た偶を得て立つ。天は用を以て

して運す。故に小物も亦た用を以てして運す。神は物を以てして立す。故に小神も亦た物を以てして立す。故に時、通ずれば、則ち後は前を繼ぎて絶えず。處、塞すれば、則ち天は地に偶して離れず。故に大物は、則ち天地を偶として、而して前後を繼とす。水火土石は自から結ぶを以てす。而して偶は反に資り、繼は氣に資る。鳥獸艸木は、感を有するを以てす。而して植は、華實を偶とし、種子を繼とす。動は、牝牡を偶とし、子母を繼とす。天は動き地は止る。動なる者は以て行く。止なる者は以て事す。故に東運西轉は天に行われ、冬夏晝夜は地に事す。雲騰雨墜は地に行われ、發收動息は物に事す。小物の應ずる所、運は行を爲し、爲は事を爲す。故に動植を分てば、則ち植は止りて技せず。動は行きて事を爲す。故に植は、則ち升降に行きて、發收に事す。動は、則ち手を事に技し、足を行に運す。故に手足無き者有り。手足有る者有り。而も其の事に技し、其の行に運するに至れば、則ち同一なり。故に大は地に偶し、会は易に偶し、絪縕窮まり無し。雌は雄に配し、華は實に配し、生生盡きず。生生盡きざるが故に、大物は則ち、後を前に繼ぎ、寒を暑に繼ぐ。小物は則ち、實を苗に嗣ぎ、母は子を嗣ぐ。故に偶は以て對し、繼は以て往く。事に技し行に運す。大小と無く、同じく之を有す。惟だ精麁は相い隔つ。其の狀は夐別なり。

配する者は、己の偶なり。之を会に於て交わう。嗣する者は己の苗なり。之を乳に於て字う。男女の受授は、生生の氣感なり。子母の乳哺は、生生の字育なり。故に男は生生の器に餘有り。女は生育の器に餘有り。故に精は、生生の氣に感ずれば、則ち有り。乳は、字育の日に非ざれば、則ち無し。共に腑の物を納る所なり。

地なる者は、我の立する所、之を足に於て歩す。器なる者は、我の用うる所、之を手に於て舞す。腑なる者は物を納る。何ぞ手足の物を納れざる。蓋し人の爲は、手を以て技巧を執り、足を以て軀殼を載す。載せて以て地を行き、執りて以て物に技す。器地なる者は身の外なり。水穀も亦た身の外なり。

運爲繼偶、諸を天地に獲る。諸を各物に交う。故に心肺肝腎、咽胃腸脛、内に在るの臓腑なり。

臓なる者は氣を藏す。故に内を實す。腑なる者は物を納る。故に内を虚す。水穀便溺、身の物に非ず。資りて繼ぐの氣は、此を假らざれば則ち立たず。故に物は此を得る。而る後、膩液を釀し、溫動を輔す。息なる者は、天氣を肺に於て引く。而して一身を衛す。其の氣は循環し、又た鼻に出す。食なる者は、地氣を肝に於て運す。而して一身を營す。滓汚は便溺を爲し、而して之を肮脏に送る。

耳目鼻舌、手足会乳は、外に在るの臓腑なり。而して臓なる者は内肉なり。内肉は外に在ると雖も、亦た能く皮の爲に覆わる。腑なる者は外皮なり。外皮は内に在ると雖も、亦た能く肉の表と爲す。内なる者は上に在り。乃ち神氣の所分なり。外なる者は下に在り。乃ち本氣の所分なり。

本氣は腑を用いて爲をす。神氣は臓に由りて意をす。本氣は本を爲す。神氣は華を爲す。資りて始まるの氣は、坱洋然として處無し。此の氣や、有生の始に成り、體解の末に散ず。首は上質の肉を攝す。身は下質の皮を攝す。嘻嗡は我を保す。飲食は我を養す。資りて繼ぐの氣は、鼻口を門戸と爲す。此の氣や、有生の後に成り、體解の前に盡きる。臓なる者は、心肺肝腎、耳目鼻舌、皆な上向す。腑なる者は、咽胃腸脛、手足会乳、皆な下向す。而して内なる者は意を舍てれば、則ち本氣は此に旺す。外なる者は意を用うれば、則ち神氣は此に旺す。

目は視て耳は聽き、鼻は聞き舌は味わうは、意を外に於て用するなり。肺は保し肝は養し、心は運し腎を持するは、意を内に於て保するなり。氣の用なり。咽は納れ胃は畜え、腸は送り脛は收むるは、爲を内に於て爲すなり。手は技し足は行き、会は交し乳は孳するは、爲を外に於て爲すなり。質の用なり。然り而して、神なる者は内に在りて、而して外は之を用う。氣なる者は外を護して、而して内は之を用う。故に神は心に華し、而して腎に實す。肺肝は氣を以て保養す。咽胃は納畜し、腸脛は收送す。共に内に在る者なり。皆な意を以て運用すること能わざる者なり。氣は配に華し、而して嗣に實す。手足は肢を以て技行す。耳目は視聽し、鼻舌は聞味す。共に其

の外に在る者なり。皆な能く意を以て運用す可き者なり。故に臟は神氣の器を爲し、腑は本氣の器を爲すと雖も、而れども内質は還って有爲の器を爲す。外質は還って用意の器を爲す。且つ神本は迭に旺す。而して一睡一覺す。氣質は相い給す。而して一食一息す。夫れ神本なる者は、生と偕に立す。故に一身に充塞して、而して門戸を假らず。臟腑なる者は、物を得て能く立す。故に氣質を運化して、能く門戸を用う。息食の受口を、口と爲し、鼻と爲す。便溺の瀉口を、肛と爲し、孄と爲す。鼻なる者は、喉の口なり。口なる者は、咽の口なり。肛なる者は、脬口なり。孄なる者は、腸口なり。此れ各一物にして、而して二名を具す。合して之を咽胃腸脬に於て統ぶ。別に此の文有るに非ざるなり。是を以て、鼻舌なる者は、聞味を具する所の臟なり。而して鼻口は、息食の道路なり。会乳なる者は、交字の生を具する所の腑なり。而して肛孄なる者は、便溺の瀉口なり。臟なる者は氣を藏す。腑なる者は質を用す。故に耳目は聲彩を通じ、鼻舌は臭味を受く。肺肝は天地の氣を保化す。心腎は、神本の氣を運持す。而して視聽は、或いは用し或いは體す。聞味は、或いは欲し或いは厭う。咽胃は水穀を運す。腸脬は便溺を通じ、会乳は精汁を生化す。手足は器地を握歩して、而して手足は、或いは取り或いは捨て、精汁は、或いは有り或いは無し。夫れ動物なる者は、種子を相い繼ぎ、先後の體を換うる者なり。故に發生の氣は、感ずれば則ち精を得る。生育の氣は、通ずれば則ち乳を生ず。臟は、肝に根し、肺に葉し、心に華し、腎に實す。而して彩聲臭味を受くるの孔を、頭中の耳目鼻舌に於て開きて、而して其の系は上を向きて、氣の用を爲す。腑は、身に幹し、肢に枝し、配に華し、嗣に實す。而して水穀便溺を受くるの孔を、腹中の咽胃腸脬に於て開きて、而して其の系は下を向きて、質の用を爲す。臟なる者は、神氣を親しむ。神氣なる者は、養を肺肝の息脈に於て資る。腑なる者は、本氣を親しむ。本氣なる者は、養を咽胃の水穀に於て資る。故に、神本の養う所は皆な内に在り。資る所は皆な外に在り。神なる者は、氣を耳目鼻舌に於て發し、本なる者は、爲を手足会乳に於て發す。故に内なる者は、天の用を爲すの器なり。外なる者は、人の用を爲すの器なり。

動植は本と同生なり。竪立横動し、意爲を没露す。故に植は地に著きて竪立し、直に寒暑雨暘に當る。是れ其の本氣に長ずるを以てなり。動は地を離れて横行し、巣窟飲哺を假る。是れ其の神氣に長ずるを以てなり。此に長ずれば、則ち彼に短なり。二の勢なり。故に、植は、自から護するの本に足る。故に保養は之を自然に任す。動は、自から護するの本に乏し。故に保養は之を營爲に仰ぐ。堅植は、輭植の榮枯を假らず。堅動は、輭動の飛走を假らず。偏に各おの其の天を保するなり。夫れ、生の處は、則ち水なり、燥なり。而して水は則ち我の處に非ず。生の類は、則ち動なり、植なり。而して植は則ち我の類に非ず。然り而して、本生は則ち水燥を天地にし、餘生は則ち分れて小物に依る。陸は、日影、寒暑晦明を爲し、水燥、雨暘煦液を爲す。故に水動は、諸を陸動に比すれば、則ち陸動は、絪縕の和を得て、文を具し神に富み、歧形多技にして、以て聡明の神を有す。之を分てば、則ち鳥は輕く獸は重く、獸は靈に鳥は頑なり。鳥は手を以て翼と爲し、翼を以て身を行り、足を以て事を執る。獸は翼を以て手に換え、足を以て身を行る。然り而して、鳥は則ち本氣に富み、獸は則ち神氣に富む。神氣に乏しければ、則ち本氣に足る。故に、羽は歩翔自在にして、羽翼自から護し、産啄に易く、謀慮に拙なり。神氣に富めば、則ち本氣に乏し。故に、獸は、歩きて翔かず。營窟假ること有り。産ずること少く乳すること久しく、思謀漸く巧なり。蓋し会易の態は、兩つながら長ずること能わず。故に生に餘有る者は文に足らず。文に餘有る者は生に足らず。是を以て、植生は動生より多し。海動は陸動より多し、故に、海動陸植は、子を生むこと數萬にして、而して陸中、獸は鳥より寡し。獸中、穎悟は人に勝るは莫し。故を以てすれば、則ち人は當に最も寡かるべし。然りと雖も、智力に勝ること有るを以て、以て能く蕃滋を致す。終に其の神を運爲して、天地に取りて、我が有と爲し、萬物を以て、我が器と爲す。神氣の長ずるを以て、而して本氣は自立すること能わず。産乳は最も艱し。疾病は最も多し。外護内養は、都て不足を神氣に於て補う。故に木を架し茅を覆い、以て風雨を禦ぎ、麻を績ぎ繭を繅し、以て寒暑を防ぐ。燧を鑽りて火を引き、井を鑿ちて水を出だす。海を煮て鹽を取り、土を墾して穀を斂む。痛痒を医薬の營に於て攻む。

饑渇を調和の爲に於て養う。屋宇を假らざれば、則ち雨暘に當ること能わず。屢屐を假らざれば、則ち土石を踐むこと能わず。本氣の不足を神氣の有餘に於て觀る可し。故に此に贏る者は、彼に儉なり。彼に贏る者は、此に儉なり。彼此は相い儉贏すと雖も、而も成る所に於ては則ち全なり。一二の故なり。故に同じく内外臓腑を具すと雖も、同じく營爲技巧を具すと雖も、人と能を爭う者莫きなり。故に生の類は、通塞巧拙に於ては則ち各有するなり。物は自から氣を具す。神は自から物を用す。鬼神の物に體して遺さざる所なり。萬物は各おの鬼神を存する所なり。無意感求は性を爲し、知通は神を爲す。有意情慾は性を爲し、意智は神を爲す。同じく是れ性神と雖も、天人は同じからざるなり。蓋し人なる者は、有意の統名なり。禽獸蟲魚も、亦た皆な意を具す。惟だ物の殊なるを以て、而して氣も殊なり。通塞は同じからざるなり。故に彼に我の神靈の通、鼓舞の巧無し。此に通ずる者の、彼に塞するは、條理の道なり。是の故に、物は氣感に厚く、人は知通に深し。其の氣を以て感ずる者は定まる。磁の北を指し、水の卑きに就き、鷄の晨を知り、燕の春を知る。期するが如く然るなり。其の智を以て通ずる者は變ず。好惡思辨は別ならずと雖も、感應運爲は同じからず。故に意通氣感は、跡は則ち反し、理は則ち同す。人なる者は、之を思いて覺り、之を慮りて通ず。之を學びて能くし、之を謀りて爲す。物なる者は、知る可き者は自から知る。能す可き者は自から能す。鳥の卵に伏す、殼を隔てて其の化を知る。啐啄相い得て、之を誤る者無し。若し之を智慮に於て索めば、能く之を知ると雖も、寧んぞ忘失せざるを保たんや。若し夫れ、食色、心を動かし、睡覺、智を轉ずるも、亦た人の氣感にして、而して意智の隨なり。人は則ち有意なりと雖も、亦た無意を平分す。故に思慮智辨、經營動作に於ては、則ち之を知ると雖も、運持保化、老壯病健に於ては則ち識らず。分かつ者は物なり。有する者は氣なり。物に天地有り。鬼神は之に由る。事に感應有り。氣質は之を用う。故に日月に行有り。寒暑に序有り。南北に方有り。天地に位有るは、物の體なり。常なり。日月の旋轉し、寒暑の往來し、南北の節を迭るに、天地の相い通ずるは、氣の用なり。變なり。故に鬼神は、天地を以て體と爲す。天地

は、鬼神を以て用と爲す。故に神なる者は、水を爲し、火を爲し、有意を爲し、無意を爲す。天なる者は、水と成り、火と成り、有意と成り、無意と成る。

而して穎悟多文、天地と勢を張る者は、惟だ人のみ有る。故に搏きて雲霄に狎るるも、繳みして之に及び、潛んで幽壑に蟄するも、餌して之を鉤す。含牙戴角も、服して之を役す。利觜鉤爪も、繫して之を檻す。日月星辰を曆象し、山川丘陵を經界す。是に於て、江海山原。金木土石。艸木鳥獸。魚鼈蟲豸。己の用に非ざる者莫し。能く聲音を轉じて、而して萬の事物、擧げて之を言語に於て認む。能く手腳を役して、而して萬の技巧、盡く、之を營爲に於て運す。已にして宇を造りて、而して言語を指頭に記す。畫を製して、而して物象を目中に認む。我は天地に有せられて、而して我も亦た天地を有す。勢を張れば、則ち天は無意にして成り、人は有意にして爲す。彼は天境を開きて、而して物は盡く其の中に居る。此は人境を開きて、而して己れ獨り此の中に立つ。是を以て、天の境を爲すや無意にして成る。人の境を爲すや爲して成らず。神は内に運し、爲は外に營す。彩を目に於て取り、聲を耳に於て取る。氣を鼻に於て取り、性を舌に於て取る。技を手に於て運し、行を腳に於て用う。交を會に於て通し、字いを乳に於て爲す。意の外用なり。嘘噏して天氣を臟中に於て保す。飲食して地質を腑中に於て化す。嘘噏飲食は、天の生生に給す。意智情慾は、人は其の中に於て成す。爲の内用なり。

鳥は、技　觜腳に在り。獸は、技　歯爪に在り。惟だ指を蹄にする者は、技　口鼻に在り。爪歯に利からざる者は、技　手指に在り。然り而して魚は、則ち之を鰭尾に於て施し、蟲豸は、則ち變化萬狀なり。且つ諸動の聲に於るも亦た技なり。而して鱗倮は聲技を用うる者少し。鳥獸は聲技無き者少し。餘生の若きに至りては、羽類に聲無き者有り。有れば則ち之を羽に於て發す。豸類に聲無き者多し、有れば則ち之を喉に於て鼓す。鳥獸に至りて、而る後に喚嘘哀樂、之を聲に於て用う。人の有意多智なるに及んで、聲の技に於る、體技と半ばす。言語は文章を爲す。營爲は事業を成す。意智は則ち思慮知辨なり。情慾は、則ち愛憎欲惡なり。故に知は通塞信疑

を有す。辨は善惡是非を生ず。思は予奪殺活を致す。慮は正詐安危を成す。思辨好惡は、融して分せず。神は變化を此に於て運す。粲物なる者は、門室に由りて、而して行居を爲し、混物の爲に、能く其の役を執る。故に、彩聲氣性なる者は、氣の我に交わる者なり。配嗣器地なる者は、質の我に接する者なり。物は氣感に厚し、人は意念に深し。意念の運する所は、思　注ぎて、而して嗜好淫念を僻す。情　厭いて、而して厭惡棄捐を出す。本氣の弱を以て、意念を役すること之れ深し。故に、憂樂は節を失い、疾病を内に釀す。其の天壽を保するに於るや。則ち物に逮ばず。我を利すれば則ち彼を損す。我を快すれば則ち人を困す。彼我は用を反して、勞逸は塗を殊にす。是の故に、聖人は則を天地に於て觀て、以て道を立す。爲を設施に於て開き、以て禮を制す。是に於て、其の位は立す可し。其の分は守る可し。其の道は行う可し。其の宅は居る可し。物に制度有り。事に法則有り。適否に由りて、而して悅怨の心を生し、而して以て善惡を擇ぶ。當否に由りて、而して榮辱の智を分ち、而して以て是非を擇ぶ。之を知るに學を以てし、之を修するに禮を以てす。